巻頭言

本年は本学の前身である善学院西谷檀林の中興、檀林開講主、心性院日遠上人第三百五十回忌に当る。上人は一如院日重上人の門下、法兄寂照院日乾上人と共に重門の双璧とうたわれ師の日重上人を頭に宗門中興、重乾遠三師と称せられ、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三代にわたる弾圧、安土法難、慶長法難をのりこえ日蓮宗磐石の基をかためた名匠である。

上人は仏心珖師の三光勝会の学系、いわゆる泉南学派の天台学中心、摂受的な教学をつぐ人であると見なされている。たしかに上人の学風を学んだ檀林の教学、関東の飯高・中村・小西等、関西の松ヶ崎、求法院等の諸檀林の学徒は円体無殊の開会思想にたつ教学を学び天台一辺倒の学制のもとに学習したから本化の教学は殆んどかえり見られなくなったようである。かの深草元政が当時檀林の学風を浄心澄公にかたり

凡そ我宗の学者、幼にして名目を習い、やや教観にわたって六十巻の中に皓首す矣。ただ一化の始終を記し理観の門を窺ふのみ。所謂、久遠の微旨、事観の妙所に至れば則ち芒乎として知らざる者おほし矣。

偶祖師の微言を聞かば酔へるが如く眠るが如く、驚くが如く怪むが如し。乃ちおもへらく、其義迂遠にして天台の説にそむく、日用信ぜざる者、滔々として皆これなり。

となげいている。ところで上人は「法華経大意」に寿量品の『毎自作是念』を釈するに

或は孔子、老子の仁義五常、虚無自然の教を教へてなりとも、又は文武をもって世を治めてなりとも、詩歌管絃の

遊びとても、農業耕作の技にても、或は称名念仏せしめても、或は三密加持を行はせても、何れの道にてもこれを方便として、遂に一切衆生をこの正直無上道の法華経に引き入れて、疾かに成仏せしめんとの広大の御慈悲なり。とのべている。しかるに世人往々にして「或は称名念仏せしめても、三密加持を行はせても」の句に泥み、日遠は念仏真言の行をも認め、絶対開会に立つ摂受主義者であると理解するむきもあるが、これは不用意な断章的な論義である。上人はこれらを方便として手がかりとして法華経に引入させようと釈するのであって、この文の始終を見れば明らかなことである。ところで慶長十三年十一月、幕府が常楽院日経に命じて浄土宗と行わせたいわゆる慶長宗論は、実は当時飛躍的に勢力をのばしつつあった日蓮宗を抑止せんために行われた謀略行為であったことは、当時の政治、宗教等、社会情勢から見て明らかである。この幕府、即ち家康の攻勢、脅迫に対し、再度宗論の開催を訴えた上人、覇者・国主として天下にのぞんでいる家康の心情を熟知しながら、なおかつこれを強請しまさに刑せらんとしたところに不惜身命、捨身弘法の大道心がうかがわれるではないか。上人が、たとえ念仏、真言であってもこれを誘引の一法とし、手掛りとして法華信仰におもむかしめんとした高い理念を了解せねばならない。

本年三月五日、第三百五十遠忌にのぞみ、謹んで捻香一炷、上人の増円妙道を祈りたてまつる。

平成三年三月

学長　宮崎英修